

## マタイ受難曲の冒頭合唱の歌詞対訳について

**Kommt, ihr Töchter, helft mir klagen** この冒頭のドイツ語の歌詞をどう訳すべきか。この4月に県立音楽堂で筆者にとっては4回目のマタイ受難曲を別の合唱団で歌ったが、この公演で字幕の対訳を任せられまず悩んだのがこの問題だった。文法的に言えば **Kommt** も **helft** も二人称親称複数に対する命令形で命令する(呼び掛けの)相手は複数の「あなた方 娘達」であり、呼び掛けているのは **mir**(私に、私を)があるので単数の「私」であることは明らかなが、誰(単数)が誰(複数)に呼び掛けているのか、そして何を求めているのか楽譜上の歌詞だけからはまいちはっきりしない。

手元にある「マタイ」の幾つかの対訳をみると「来たれ、娘たちよ、われと共に嘆け」(杉山好)、「きたれ、汝ら娘たち、きたりてともに嘆かん」(皆川達夫)、「来なさい、娘たち、ともに嘆きましょう」(磯山雅)、「おいで 娘たち ともに嘆こう」(樋口隆一)、「来たれ、娘たち、わが嘆きを助けよ」(鈴木雅明)などがあり、これだけでは呼び掛けている人物が男だが女だかさえもあいまいである。

ところでマタイ受難曲は、新約聖書「マタイによる福音書」第26章1節から第27章第66節(テキストはマルティン・ルターのドイツ語訳聖書、そういえば来年はルターによる宗教改革(1517年)から500周年で記念行事が盛大に行われるらしい)を軸に、バッハと同時代の詩人ピカンダー(1700-1764、本名はクリスティアン・フリードリッヒ・ヘンリーキ)が台本を作り、彼の自由詩による合唱曲やレチタティーヴォ(朗読)・アリア、当時ルター派教会で歌われていた讃美歌に基づく13曲にも及ぶコラール(原作者は様々で詳細は先に配布した逐語対訳の注記を参照して下さい)をちりばめて、イエス・キリストの受難(Passion)を一編の壮大な音楽劇として仕立て上げられたものである。

「マタイ」は1727年4月ライプツィヒの聖トーマス教会で初演されたが、その2年後に出版されたピカンダーの詩集(日本でも2013年に新潟のバッハホールで公開された)に含まれている「マタイ」の台本からは「シオンの娘 **Die Tochter Zion**(常に単数扱い)」と「信じる者達 **Die Gläubigen**(常に複数扱い)」の対話の様式で全体が進められており、両者は常に1対多の関係になっているという(磯山氏のブログ「ピカンダーの構想」2013)。

「シオンの娘」とは聖地エルサレムの擬人化で、キリスト教徒にとってはイエスの「花嫁」であり、教会のシンボルと見なされている人物である(アーノンクール著「音楽は対話である」)。してみると「信じる者達」はさしずめ教会に集う「信徒」ということになる。バッハは最初のうちは「シオンの娘」のテキストをすべてソリストに歌わせていたが、作曲過程でこれを二重合唱編成にし、「シオンの娘」は第1合唱に、「信徒」は第2合唱に振り分けたという。これを明瞭に示しているのが先ごろ亡くなった古楽の巨匠アーノンクールのCD(2000年5月録音盤)のブックレットで、第1曲だけでなく第19・20曲、第27曲、第30曲などには個々の歌詞の前に「シオン」<信徒>と役割分担がはっきり書いてある。(正直なはなし筆者はこのCDの輸入盤は発売当時から愛聴していたがこのブックレットの注記には全く気付かず、最近発売された国内盤の対訳部分を見て初めて気付いた次第である。)これによれば「マタイ」の冒頭合唱は呼び掛け役の「シオンの娘(単数)」(第1合唱)と聞き役の「娘達=信徒(複数)」(第2合唱)の対話であることは明らかであり、女性同士の対話なら上掲の対訳はもう少し丁寧なすべきと思うのだが。

ところで次の **helft mir klagen** は直訳すれば「私が嘆くのを助けて」となり上記の鈴木雅明の訳「わが嘆きを助けよ」がこれに一番近いが、なぜか「共に嘆こう」派が多い。なかには「嘆き悲しむ我をば支えよ」(藤原一弘)とまで踏み込んで意識する向きもある。(意識といえば先に配布した第1部の逐語対訳の最終頁に第29曲の対訳一覧を参考につけておいたが、これを精査すれば分かるように一つの原文に対して何と様々の対訳(解釈)があることか、中には原文に全くない文章まで付けられている。日本語よりもはるかに原文に忠実に訳せると思われる英訳においてもそうである。一つの対訳に頼りすぎることは如何に危ないことか。)

ピカンダーはこの対話部分のイメージを「ルカによる福音書」第23章27節「民衆と嘆き悲しむ衆から得たと言う(磯山雅著「マタイ受難曲」東京書籍130頁)。民衆と婦人達が嘆き悲しみつつ従うという情景の雰囲気「マタイ」の冒頭合唱により喚起されるものとよく似ているというのだ。

しかし冒頭合唱の **klagen** を本当に「嘆く」と訳すべきなのか筆者は以前から疑問に思っている。深沈とした管弦楽によるホ短調の前奏は確かに悲しみに満ちた音楽であり、十字架を背負ったイエスの刑場ゴルゴタへの道行きを暗示する(特に6~7節の通奏低音の13音階の上昇は十字架に掛けられる情景の描写という)と言えるが、冒頭合唱でシオンの娘が信徒達に助けを求めているのは自分が「嘆く」のを手伝って貰って「共に嘆こう」というものだろうか。

ドイツ語の **klagen** には「嘆く」のほかに「哀訴する・訴える」という意味がある。法律用語では **Klage** は「提訴」、**Kläger** は「原告」、**Angeklagte** は「被告」だ。さらには冒頭の **klagen** に続く歌詞 **"Sehet (見て) Wen? (誰を) den Bräutigam (花婿を)"**、**"Seht ihn (彼を見て) Wie? (どのような) als wie ein Lamm (子羊のような姿を)"** の内容からしても、<シオンの娘>が<信徒の娘達>に求めているのは「嘆くのを助けて」というよりも「私のイエスを見て」と訴えているのではないかという気がしてならない。

この第1曲はマタイ受難曲のプロローグ(序幕)であり、対話の途中から入って来るソプラノ・婦人たちが大きな群れを成して、(十字架を背負うシモンを伴って刑場に向かう)イエスに従った。」の記  
イン・リピエーノ(「リピエーノ」とはここでは「通奏低音(ここではオルガン)に付け足される音」という意味で通常は児童合唱)が歌うコラール(作曲者はゲーティウスでラテン語のアニヌス・デイ(神の子羊)の独訳)は一段と高い次元からイエスの受難が「贖罪」(人間の罪を代わりに背負うこと)であることを明らかにしているように、第1曲全体はイエスを失う哀しみの「嘆き節」として捉えるよりも受難の意義そのものを訴える内容と捉えるべきではないか。

そういう考えから先の字幕では冒頭部分の歌詞は「シオンの娘と信徒の娘達との対話」と注記したうえで「こちらに来て 娘達よ 私の訴えを聴いて」と訳してみた。これが適訳かどうかは皆様のご批判を待ちたいが、幸い字幕全体は超満員のお客さんには「わかりやすい」「マタイのストーリーが初めて分かった」などと演奏そのものとともに予想以上に好評だったのでほっとしている。ハルモニーコールの公演ではさらに吟味してより良い字幕対訳を作りたいと思っている。

【後記】「マタイ」は筆者にとって今回は5回目の挑戦であり、書きたいことも多々ありますので新井さんとともに「マタイ」にまつわる色々な話題をとりあげて行きたいと思っております。これからもご愛読の程よろしくお願ひします。(山田)